

アフォリズム集

井坂康志

「いやはや、悪魔にでも身売りたい気分だ。私が悪魔でさえなかったら」(ゲーテ『ファウスト』)

愚かさとは未発見の才能である。

愚かさと饒舌の兼業は可能だが、愚かさと沈黙の兼業は不可能である。

善意がすぐに伝わるとは限らない。しかし敵意は瞬時に伝わる。

正義とは現れ方を見るかぎり美德より狂気に似ている。

脱帽したければ、まず帽子をかぶりたまえ。

人は見慣れない幸福よりも見慣れた不幸を選ぶ動物である。

理想的な距離感に二つある。一つはスープの冷めない距離。もう一つはパンチの届かない距離。

道半ばもまた一つの道である。

日々頭を悩ませる問題の多くは、怠慢より、ひたむきな努力の結果である。

「悪いようにはしないから」を信じると必ず不幸になる。

世のすべて善人とする前提は、世のすべてを悪人とする想定と同様に非現実的である。

最悪の事態は、最も起こりそうもないところから起こる。

決定的敗北を避ける唯一の方法、それは日々少しずつ負けておくことである。

理解したと断言することは誤解している最も明らかな兆候である。

愚痴も、明晰に言語化できれば論文となり、駄弁も美的に言語化できれば詩となる。

甘く見積もることは、既に失敗への力強い一歩である。

自らの無知や愚かさを繊細に感知することほど高度な知性を要するものはない。反対に自らの有能さや優秀さを感知するにはさほどの知性は要しない。

理解とは法外な授業料を要求する学校に似ている。一つの理解を得るには、千の誤解を経験しなければならない。

聞かれもしないのに話すことにその人自身気づいていないコンプレックスは現れる。

のらりくらりに勝る戦略はない。

人が不幸な社会は悪い社会にすぎないが、人が不幸であることを許さない社会は真に邪悪な社会である。

「ここに悪い人はいませんから」とにこやかに笑う人は、当人が悪い人である。

感動を強調する人は、心のなかに深刻な無感動を抱えている。

未来とは、なんとかなると錯覚している過去である。

非政治性の過剰な強調ほど権威主義的なものではなく、無私性の過剰な強調ほどエゴイスティックなものはない。

正しく動機に耳を澄ませれば、話は早い。

人の口にする言葉のほとんどは、思いつきか沈黙を避けたいだけか、あるいはその両方かによる。

ドアノブはいつも向こう側についている。

人生とは他人事が自分事になっていく過程にすぎない。

何か大事なものが壊れるとき、音がしないこともある。

「ちなみに」といって切り出される時、その問いは本質的である可能性が高い。「釈迦に説法ですが」といって切り出される時、その話は厳しい叱責で締めくくられる可能性が高い。

多忙な人より暇な人の方が疲れている。

若い頃の授業料は時に成果を遥かに上回って高いが、それなしでは人はどこへも行くことができない。

黒猫に生まれるのは黒猫のせいではないが、黒猫の黒さを生かせないならそれはその黒猫のせいである。

過去を直視することは、過去の呪縛を逃れる最も有効な方法である。

世の中愚かさが増えているのではない。愚かさの居場所がなくなっているだけである。

自由はある。どこにでもある。窓口だけがない。

言葉を上手に使える人は、言葉に使われるのが上手な人である。

ポジティブなだけの愚かさほどはた迷惑なものはない。

不足以上に過剰が損なうものの方が大きい。

未来とは太陽に似ている。燦然と輝く希望の根源でありながら、直視した人はいない。

一つの理屈しかないなら、まったく理屈のないほうが遥かにましである。

最悪だと連呼しているうちはまだ入り口に過ぎない。

過去は妙薬であり、未来は麻薬である。

ある人にとってイエスはノーであり、別の人にとってのノーはイエスである。ある人にとっての無言はイエスであり、別の人にとっての無言はノーである。

愛がなければ、書くことはできない。しかしひとたび愛が生まれれば、もはや書かずにはいられない。